原　著

カナダ英語の特徴

浅田　壽男[*,1)]

＜要　旨＞

言語研究はどのような研究方法にあっても、その言語の背景にあるものを理解することが助けとなる。これまでの一連の拙著拙論はカナダ英語について音声面を含む様々な角度から個々の事例を論じると共に、カナダのトロントでの体験や日常の暮らしから得た知識は、カナダ英語の理解を一層、深めてくれることを論じて来た。

筆者が暮らしたトロントは、カナダ最大の都市であり、首都のオタワにも近く、フランス語圏のケベック州にも各種交通機関で数時間の所に位置しており、しかもカナダ各地への交通網が集中していて、カナダ英語の研究に最も適した地域の1つである。

トロントでの研究のみならず、日常生活そのものから、日本では知りえないカナダ英語やカナダの文化に関する貴重な知識や情報を得ることができた。

これまではカナダ英語の個々の具体例を音声面も含め、全般的に詳述して来たので、本稿ではカナダ英語がイギリス英語を保持している点を中心に、主に文法や語法面から、その特徴を俯瞰したいと思う。カナダ英語の最大の特徴は、何よりもイギリス英語とアメリカ英語が不規則に混在している点にある。したがって、どのような場合にイギリス英語が用いられ、どのような場合にアメリカ英語を採るのか、といった規則性を追求するような研究は、元来、カナダ英語の解明には向かないことは明らかである。カナダ英語の特徴を表す個々の具体例を一つずつ細かく丁寧に記述していく方向に加えて、その表現を生み出したカナダの歴史や文化の視点から探ることがカナダ英語の理解への近道であると言える。本稿がカナダ英語とカナダという国を一層深く理解するための一助となれば望外の喜びである。

キーワード：カナダ英語、カナダの文化と歴史、カナダの地名と住民呼称、記述言語学、イギリス英語

1．はじめに

これまで一連の拙著拙論[2)]では、筆者自身がカナダの暮らしの中で収集した具体例[3)]を、「カナダ英語の中のイギリス英語」「カナダ英語の中のアメリカ英語」「カナダ独自の英語」に分類して、音声面も含めて全般にわたって個々の具体例を詳述したので、本稿では特にカナダの歴史や文化の視点から語法や文法面を中心にカナダ英語の特徴を俯瞰したいと思う。

カナダ英語の最大の特徴は、イギリス英語とアメリカ英語が不規則に混在しているところにある。例えば手元の英語学辞典[4)]や言語学辞典を開いても、(1) のように、カナダ英語とは「イギリス英語とアメリカ英語の混在した英語」と述べて、いくつかの具体例を掲げるのみである。

(1) イギリス英語（British English）とアメリカ英語（American English）の中間的な英語と位置づけられることが多い。つづり字では honour（honor《米》）, centre（center《米》）とイギリス式、語彙では elevator（lift《英》）, gasoline（petrol《英》）とアメリカ式に従い、…（以下省略）―寺澤（編）(2002: 81)

このような「イギリス英語とアメリカ英語の混在」という記述は決して満足できるものではないので、冒頭で述べたように、カナダ英語の個々の具体例を３つに分類して各々を論じ始めた。

＊　西南女学院大学人文学部観光文化学科　非常勤講師

ただ、この分類自体はカナダ英語のありのままの記述ではあるものの、どのような場合にイギリス英語を採り、どのような場合にアメリカ英語を採るのかを予測したり、ルール化につながるものではない。

この状況は1950年代初頭、特にアメリカで隆盛を極めた構造言語学（構造主義言語学）[5]が、言語のありのままの記述に徹することで、言語学を科学の領域に高めたと評されるに至った状況を思い起こさせる。つまり「イギリス英語とアメリカ英語の混在した英語」という記述を構造言語学流に言い換えれば「イギリス英語とアメリカ英語がカナダ英語の中に不規則に分布（distribution）している」ということであり、「それらが生起する言語的環境を予測し得ない」以上、分布を予測しようとするようなアプローチは不向きであると言える。したがって、カナダ英語の研究は、個々の具体例を一つでも多く、ありのままに記述することから始めるべきであるし、また、それらを生み出した背景であるカナダの歴史や文化を綿密に探るべきであろう。

2．イギリス英語を維持する不断の方策や熱意

世界の英語がアメリカ英語化の大波を被って久しいが、特にカナダは同じ北米大陸にあって国境線一つでアメリカを隣国とするために、古くから絶え間なくアメリカ英語の影響を受けている。ラジオやテレビの電波は国境を越え、インターネットの普及拡大は、カナダとアメリカだけでなく、世界中をボーダーレスにしたことは今更言うまでもない。

Boberg（2010）は、テレビやインターネットを通じて、アメリカ文化がカナダ英語やカナダ文化の中に拡散し、多大な影響を与えていることを、カナダ統計局の調査に基づいて詳細に論じている。

(2) American culture diffuses easily into Canada along well-established channels: by 2001, according to Statistics Canada, the Canadian government's official statistical agency, 99 percent of Canadian households had a television, 92 percent a video cassette recorder, 71 percent a compact disc player, 68 percent cable television service, and 50 percent home access to the internet. ―Boberg（2010: 31）

さらに両国間の人々の直接的な交流に目を向けると、国境線一つで隣り合わせているだけに、両国間の往来はきわめて容易で、例えばオンタリオ州のナイアガラ市には、ナイアガラ滝からナイアガラ川沿いに徒歩で10分ほどの所にレインボー・ブリッジという全長わずか300メートルほどの橋が架かっていて、この橋の中央にカナダとアメリカの国境がある。この橋を渡ればアメリカ・ニューヨーク州バッファローに続いているので、週末にもなるとアメリカ側からカナダのナイアガラ公園に遊びに来る観光客が多いだけでなく、カナダ側からもアメリカ側からもお互いに、日々、通勤通学する人も多いので、当然ながら、アメリカ文化がカナダへ流入し、拡散することは止めようがない。したがって、イギリス英語を維持する不断の努力や何らかの方策が無ければ、イギリス英語の維持存続は不可能である。

古い話になるが、初代首相マクドナルド（John A. Macdonald）は、在職中に政府の全ての公文書はイギリス英語で書くように勅令を出したが、歴史から見れば、イギリス英語を維持する不断の努力や方策の歴史に残る具体例だと言える。

(3) He had an order-in-council passed directing that all government's papers be written in the British style, as with "labour" rather than "labor." ―Gwyn（2008:4）

現在カナダは、官公庁や学校の教育現場ではイギリス英語寄りで、日常生活ではアメリカ英語寄りだと言われるが、古くから学校ではイギリス英語を教えて来たことは、次のOrkin（1970）にも指摘がある。

(4) It can be truly said that "the British standard is taught to practically every Canadian school-child and used throughout school life. It is the standard of the great majority of Canadian universities and colleges."― Orkin（1970: 149）

また、カナダの新聞大手各紙がイギリス英語を用いるという編集方針を採っている。筆者も2010年にヨーク大学の研究員として渡加した折、まだ大学のアパートに入居する前のホテル滞在中に、カナダ最大の日刊紙The Globe and Mailに目を通していて、ふと「母」の略語がアメリカ英語式のmomではなく、イギリス英語式のmumと綴られていることに気づいて、はっ

とした経験がある[6]。このように、現在、カナダの新聞各紙がイギリス英語を用いる編集方針を採っていることもイギリス英語の維持存続に多大な貢献をしていることは明らかである。

３．カナダの中のイギリス地名

トロント市の西側に隣接し、「広域トロント圏」（Greater Toronto Area）を構成する都市の１つであるミシサガ市（City of Mississauga）に日本名の道路 Kariya Drive（刈谷道路）があることを紹介して、ミシサガ市と刈谷市の、ひいてはカナダと日本の、長年の文化交流の深さや友好関係の強さを示す証拠であると論じた[7]。

地名はその地域のみならず一国の歴史や文化を直接に映し出していると言える。

筆者がヨーク大学のアパートで暮らしていた当時、バスや地下鉄で約 30 分ほどの所にノースヨーク市民センター（North York Civic Centre）があり、この前の Mel Lastman Square という公園で毎週末、マーケットが立ったが、野菜が豊富で新鮮だったので、頻繁に訪れた。ある日、ここの野菜がロンドンから出荷されていると聞いて、英国のロンドンから空輸でもされているのかと驚いたが、よくよく尋ねると、このロンドンは、トロントから車で約１時間の所にある町（City of London,）だと教えられて、納得したことを思い出す。この町はイギリスの首都ロンドンと全く同名であるだけでなく、ここに暮らす人々は「ロンドン子」（Londoner）と呼ばれていて、この点でもイギリスのロンドンと全く同じである。

この時以来、イギリスの地名がどれほどカナダにあるのかに関心を持つようになったが、注目するようになると、カナダ中にイギリスの地名があふれていて、London どころか Cambridge や Oxford もあり、イギリスのシンボル「ビッグ・ベン」を擁する Westminster 宮殿から、女王エリザベス 2 世が週末に過ごす城がある Windsor まで、世界に名が知れたイギリスの地名があまりにも数多くカナダに存在することには驚かされる。ちなみにカナダのイギリス地名が一覧できるインターネット Web サイト[8]を見ると、Ontario 州だけでも 120 カ所以上も挙げられている。

かつてフランスに遅れること約 50 年、イギリスの探検家ハンフリー・ギルバート卿が 1583 年、ニューファンドランドに到達して、ここを英国領と宣言して以来、カナダで英仏両国による植民活動の競争が始まったが、思えばカナダ英語の歴史もここに始まっている。本国のイギリスを離れた移民が、新しいカナダの地に本国と同じイギリスを再現しようと願ったことは想像に難くなく、長い歴史の中でカナダ各地に数多くのイギリス地名が刻まれることになった。この本国イギリスを遠く離れた植民地にも再現しようとする情熱は、イギリス英語をカナダで維持しようとする熱意と同根である。

４．カナダの demonyms（住民呼称）

日本語には、江戸っ子、浪速っ子、博多っ子などのように、その土地や地域の人を指す特別な呼称がある。demonym とは言語学の分野でギリシャ語の demos（人々）と -nym（名称）を合成して、新しく作られた専門用語であるが、試しに手元の Margery & McAlpine を見ても、2001 年の初版には全く記載がなく、2007 年の第 2 版になって、ようやく「関連語を参照」という簡単な項目が出始めたことから判断すれば、2007 年頃になって少しずつ使われ始めた新しい術語である。

demonyms は日本に限らずアメリカでは筆者懐かしの地カリフォルニアで Californian（カリフォルニア州の人）と言われるし、New Yorker（ニューヨーク市民）、Texan（テキサス州の人）などと言われ、イギリスでは Londoner, Cockney（ロンドン子）、Loiner（リーズの住民）、Mancunian（マンチェスターの住民）、また筆者思い出の地ノッティンガムでは Nottinghamian（ノッティンガムの住民）などと言われる。

ただカナダは、多くの先住民族が暮らす土地に 1500 年代半ばからイギリスとフランスが植民活動を競った歴史をもつため、demonyms も多彩であり、複雑であるが、それだけにカナダ英語の特徴として注目に値する。

例えば Londoner（オンタリオ州のロンドン子）、Torontonian（トロント住民）、Ottawan（オタワ市民）などに加えて、フランス語圏のケベック州になると Montrealer（モントリオール住民）はともかく、Québécois（ケベック住民）というフランス語名は英語の文脈でも、特にフランス語しか使用しない住民に対して、Quebecer や Quebecker という英語名よりも Québécois のまま使われることが多い。

さらに特異なdemonymsには、Nova Scotian（ノヴァ・スコシア州の人）を指すBluenoseがある。1920～1930年代にノヴァ・スコシア州の競争用帆船Bluenoseが有名になり、一躍カナダのシンボルになったことから、現在のカナダ10セント硬貨のデザインにも採用された。俗説では、ノヴァ・スコシア州を有名にした帆船Bluenoseにちなんでノヴァ・スコシア州人を指すようになったと言われているが、*Guide*を見ると、帆船Bluenoseが現れるずっと以前からノヴァ・スコシア州人を指すdemonymsとして用いられていたので、語源は不明と述べている。例えば*Oxford*にも、ノヴァ・スコシアの漁師の鼻が寒さで青くなっていたからだとの、また別の俗説が紹介されていて面白い。

また、ノヴァ・スコシア州の州都ハリファックス（Halifax）にもHaligonian（ハリファックス住民）という特異なdemonymsがある。一説によると、1900年代には英語地名のラテン語訳からdemonymsを作ることが流行したようで、*Oxford*には「Halifaxのラテン語訳Haligoniaに『人』を表す接尾辞の-anを加えた」と説明が見られるが、*Guide*は「語源不明」（mystery）と明言している。なお、Halifaxはイギリスにある同名の土地とは無関係で、1749年、当時この地を治めていた第2代ハリファックス伯爵（the 2nd Earl of Halifax）にちなんで命名されたとのことである。

これらカナダのdemonymsの詳しいリストはBarber（2007: 242-248）にあるが、インターネット上にもPublic Works and Government Services Canadaというサイト[9]があり、参考になる。

5．カナダ英語の代表例再考

5．1．形態素 -centre と -center の混在

単独の語としてはイギリス英語の綴りcentreが一般に用いられている。例えば、次のような記述が*Guide*にも見られる。

(5) Centre is the British spelling and center the American. Generally, Canadian writers use centre when referring to a place, such as a shopping mall, a housing complex, or an entertainment or research facility.—*Guide*, p.111

しかし、地名や道路名、さらには建物の名称に対して、いわゆる複合語として用いられる形態素（morpheme）に目を向けると、イギリス英語のcentre-とアメリカ英語のcenter-が不規則に混在していることに気づく。拙著（2015 : 64-65）ではこの点をカナダ英語の特徴を示す具体例の1つだと述べた。centre-とcenter-の具体例など、詳細は拙著（2015: 64-65）や拙著（2018: 24-26）に譲り、ここで少し敷衍すれば、日頃忘れがちな「言語の背景にある一国の文化や歴史を示す」好例だと言えよう。

5．2．建物の階数表現

イギリスでは建物の階数表示に関して、1階をground floor、2階をfirst floor、3階をsecond floor…と呼ぶが、アメリカでは、それぞれをfirst floor, second floor, third floor…と呼んでいて、イギリス英語とアメリカ英語の階数表現が大きく異なることはよく知られているが、その一方で、イギリス英語の規範とアメリカ英語の規範が混在するカナダで階数がどのように表現されているのかについて、ほとんど知られていない。

あくまでも一般論として言えば、カナダでは学校英語や書き言葉がイギリス英語式で、話し言葉がアメリカ英語式だと言えるが、特に海外からの観光客も利用するようなホテルや公共の建物では1階をfirst floor、2階をsecond floor…のように、アメリカ英語式に呼んでいて、階数の誤解を招かないという点でも望ましいと言える。したがって一般的にカナダでも、ホテルなどは、たいていアメリカ英語式に1階をfirst floor、2階をsecond floor…と呼んでいる。

しかし、普段、地元住民が利用する公共の施設や建物になると、1階はイギリス英語式にground floorと呼びながら、2階以降はアメリカ英語式にsecond floor、third floor…と呼ぶことが多く見られる。カナダの町中でアメリカ英語の会話が飛び交う中、このような階数表示に出会って初めて、ここはアメリカではなく、カナダだと気づいて、はっとさせられる。ほとんど知られていないが、この「英米折衷型の階数表示」は、イギリス英語を維持存続しているカナダ独特の英語表現として、たいへん興味深い。

ちなみに拙著（2015: 55）には筆者自身が実際に見つけたトロントのノースヨーク・センター（North York Centre）の建物フロア図に見られる「英米折衷型の階数表示」を、また拙著（2018: 65）にはプリンス・エドワード島にある「赤毛のアンの家」（Green Gables House）で入場者向けに配布される間取り図

に見られる「英米折衷型の階数表示」を、それぞれ写真で紹介している。

5．3．カナダを代表する Toonie Tuesday

ケンタッキー・フライドチキン（KFC）が販売促進の方策として始めた Toonie Tuesday は、すでに名実ともにカナダを代表する標語になった。

カナダで暮らしていると、毎日、必ずお目にかかる宣伝文句に "Toonie Tuesday"（火曜日は特価の２ドル）がある。本家本元の KFC を越えて、例えばサンドイッチ専門の Subway をはじめ、様々なファースト・フード店の販売促進の常套句として、日々、新聞の広告や折り込みチラシ、テレビの CM 等、あらゆる所でお目にかかる。

現在では、ファースト・フード店の販売促進に限らず、遊園地や公園などの入場料にもどんどん利用されている。

また、毎年６月の最終週に約 10 日間、セクシャル・マイノリティの認知と理解を訴える盛大な祭典「プライド・ウィーク」の一環として最終日に行われるトロントのプライド・パレードは、様々なグループや個人が日頃の主義主張をプラカードにしてトロントの街を練り歩くが、筆者が見物した 2010 年度のパレードにも様々な企業や団体に混じって、Toonie Tuesday のプラカードを掲げて行進するグループがいた。

そもそもカナダの２ドル硬貨が俗称として toonie と呼ばれるところから、語呂合わで「火曜日は２ドルで」と、特価をアッピールしている。したがって同じ英語圏でもカナダ以外には絶対に存在しない独特の表現である。

現在では KFC の宣伝文句を越えて、「２ドルという安い金額」と「火曜日」に関わる限り、およそあらゆる場合に使われる「謳い文句」として独り歩きしている。

物価高騰に合わせ、2005 年に本家の KFC が「チキンのから揚げ２個とフライド・ポテト」のメニューはそのままながら、２ドル 22 セントに値上げし、厳密には toonie、つまり２ドルでなくなって久しい。つまり Toonie Tuesday は厳密な２ドルではなく「安価であること」「金額の些少」を強調して訴える標語になってしまったために、toonie（２ドル）より高くなったのに toonie と言うことへの疑問や不満をインターネット上で訴える声[10]も数多い。筆者がトロントで暮らした 2010 年には２ドル 79 セントになっていて、金額が確認できる広告写真[11]を拙著に掲載している。

いずれにせよ

（第１点）実際に２ドルでなくなってからも引き続いて日々用いられていること。

（第２点）この標語を生み出した１ドル硬貨が、2017 年のカナダ建国 150 周年の節目を祝って一新され、すでに図柄が水鳥「アビ」（loon）ではなくなったこと。つまり１ドル硬貨の図柄（loon）ゆえに俗称の loonie が生まれ、２ドル硬貨が語呂合わせで toonie と呼ばれた経緯があるので、今後は新硬貨に関する限り toonie と呼べなくなったこと。

これらの２点にも関わらず、現在も日々変わらず Toonie Tuesday が使われ続けていること自体、この表現がカナダを代表する標語になったことの証左である。

普段、意識することはないが、たった１つの言葉にも「その国の文化や歴史」が反映しており、Toonie Tuesday は、そのことを喚起する好例であるだけでなく、語源が明確であるという点でも極めて貴重なカナダ英語の具体例である。

なお、1986 年 11 月３日にウィニペグの鋳造所で１ドル硬貨鋳造の際、予定されていた「カナダの狩猟民族」の図柄から突然「アビ」の図柄に変更された経緯、これら両者の実際の図柄、カナダの国鳥「アビ」の姿など、写真も含めて詳細は拙著（2015: 56-58）ならびに拙著（2018: 21-22）で述べている。

6．むすびに

本稿は冒頭で述べたように、これまでに一連の拙著拙稿で取り上げたカナダ英語の個々の具体例を離れて、カナダ英語の特徴そのものをカナダの歴史や文化の視点から俯瞰した。

カナダ英語の最大の特徴は、イギリス英語とアメリカ英語が不規則に混在しているところにあるために、カナダ英語における両者の分布を追求するよりも、現在のカナダ英語の姿を横糸とすれば、歴史的変遷ならびに文化的側面を縦糸として、カナダ英語の特徴を表す個々の具体例を、いわば立体的に、ないしは多面的に記述することが望ましいと述べるに至った。

また最後に、カナダ英語を代表する３つの具体例を再考して、実際にそのような方向を示そうと試みた。

結びに際し、本稿がカナダ英語を理解するための一助となれば望外の幸いである。

謝　辞

まず非常勤講師の筆者に本誌への論文投稿の機会を賜りました西南女学院大学ならびに関係各位に衷心よりお礼を申し上げます。

私事にわたることをお許しいただきますが、筆者は1979年春に故郷の関西を離れて、新天地の小倉に足を踏み入れ、北九州大学で初めて大学の教壇に立ちました。当時、外国語学部には西南女学院短大英語科で英語学を担当されていた故・土居琢磨教授がおられましたが、ご多忙のため、筆者がこの科目を引き継くことになり、1983年4月からこの科目を担当させていただきました。振り返れば筆者が勤め始めた頃には各地の大学が次々と様変わりし始めましたが、西南女学院短大英語科は変わらぬリベラルな学風の中、熱意あふれる先生方、職員の方々、学生が集う理想の学園でした。懐かしい思い出の数々に加え、当時、学長の渡邊仁先生や学科長の阿部弘先生をはじめ、多くの先生方や職員の皆様のお支えやご親切は生涯忘れることはありません。

2000年から2015年まで、予期せぬ親の介護問題で関西に戻ることになりましたが、この15年を除いても、今日まで四半世紀を西南女学院で過ごさせていただきました。関西での介護問題は幸い決着し、勤務していた関西学院大学は定年退職して、2015年の初夏に戻って参りましたが、新しい西南女学院大学に再び非常勤講師として勤めさせていただくことになり、深いご縁を感じます。

いつまでも西南女学院に勤めたいと願うものの、年齢の壁はいかんともしがたく、最後の年を迎えましたが、今回、年来の夢であった本誌への投稿の機会を賜り、これに過ぎる喜びはありません。拙稿がわずかでも報恩の印になればと願うばかりです。

まず何よりも夢の実現が見えなかった筆者にこの道を切り開いてくださいました西南女学院大学図書館の西川忍前課長に心から感謝申し上げます。また長年にわたって文献資料の収集に、常日頃から多大なご援助を賜りました西南女学院大学図書館と関係各位に、さらに定年退職後も在職時と変わらず利用させていただいている関西学院大学図書館と関係各位に、加えて、度重なる転居の際に紛失した貴重な執筆資料を快くご提供くださいました東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター図書室と司書の横田睦氏に深く感謝申し上げます。

謝辞が長くなりましたが、長年にわたり賜りましたご厚情とお支えに、改めまして篤くお礼申し上げますと共に、西南女学院のますますのご発展と、先生方、職員の皆々様のご健康とご多幸をお祈りしつつ、擱筆いたします。

注

1）本学人文学部非常勤講師。元・北九州大学（外国語学部）教授（1979～2000年）、元・関西学院大学（社会学部/言語コミュニケーション文化研究科）教授（2000～2015年）。

2）拙論（2011, 2012a, 2012b, 2013, 2014）、拙著（2015, 2018）。なお拙論は、（2012b）を除いて関西学院大学リポジトリ（https://kwansei.repo.nii.ac.jp/）にも所収。

3）当時の勤務先、関西学院大学の留学制度による支援を受けて、2010年3月22日から2010年9月20日までの半年間、カナダのオンタリオ州トロントにあるヨーク大学・英語学部（Department of English, Faculty of Liberal Arts and Professional Studies, York University）に客員研究員として滞在し、トロントで暮らす機会を得た。

4）他の英語学辞典や言語学辞典と同様、寺澤（編）（2002）でも「Canadian English」（カナダ英語）の記述は、残念ながら僅か半頁に留まっている。

5）拙著（1997: 83-88）をご参照のこと。

6）拙著（2018: 98）をご参照のこと。

7）詳細は拙著（2018: 40-41）をご参照のこと。

8）List of locations in Canada with an English name（https://en.wikipedia.org/wiki/List_oflocations_in_Canada_with_an_English_name）（参照2020年7月26日）

9）*demonyms in Canada*（https://www.btb.termiumplus.gc.ca/tpv2guides/guides/wrtps/index-fra.html?lang=fra&lettr=indx_catlog_d&page=9mzc6KoR3xTY.html）（参照2020年7月26日）

10）例えば*TRIBE MAGAZINE ONLINE SINCE ‘94/ ON THE WEB SINCE ‘94*（https://www.tribemagazine.com/board/threads/toonie-tuesdays-at-kfc-the-true-story.101813/）（参照2020年8月28日）には、微妙な値上げで、厳密にはtoonieでなくなった不満を訴える2005年9月27日付けの投稿が掲載されている。

11）拙著（2015: 56）のカラー写真50、拙著（2018: 21）のモノクロ写真をご参照のこと。なお、具体例の枚挙にはいとまがないが、例えば、現在、オタワ教育財団

（Education Foundation of Ottawa）による募金広告（2020 年 2 月 25 日付）にも Toonie Tuesday が用いられているし（https://www.educationfoundationottawa.ca/in-your-school/toonietuesday/#:~:text=How%20Toonie%20Tuesday%20works.%20Toonie%20Tuesday%20is%20all,directly%20to%20the%20Students%20in%20Crisis%20Emergency%20Fund.）（参照 2020 年 4 月 26 日）、またナイアガラ滝観光のナイアガラ公園が、販売促進のための特典の謳い文句として使用している（https://www.niagara-parks.com/visit-niagara-parks/summer-2020-pro-motions）（参照 2020 年 8 月 10 日）。

参考文献

1）浅田壽男（1997）『新版 英語学講義』岡山：大学教育出版

2）浅田壽男（2011）「カナダ英語の背景―カナダの暮らしと言語（その1）―」『社会学部紀要』第 112 号　pp.55-62 関西学院大学

3）浅田壽男（2012a）「カナダ英語の背景―カナダの暮らしと言語（その3）―」『社会学部紀要』第 114 号　pp.65-77 関西学院大学

4）浅田壽男（2012b）「カナダ英語の背景―カナダの暮らしと言語（その2）―」『21 世紀 英語研究の諸相―言語と文化からの視点―』pp.466-479 東京：開拓社

5）浅田壽男（2013）「カナダ英語の背景―カナダの暮らしと言語（その4）―」『社会学部紀要』第 116 号　pp.63-70 関西学院大学

6）浅田壽男（2014）「カナダ英語の背景―カナダの暮らしと言語（その5）―」『社会学部紀要』第 118 号　pp.11-29 関西学院大学

7）浅田壽男（2015）『カナダの暮らしと言語―カナダ英語の背景―』（関西学院大学研究叢書 第 171 編）東京：朝日出版社

8）浅田壽男（2018）『カナダ―言語・文化・社会―』（改訂増補版）西宮：関西学院大学出版会

9）Barber, Katherine（ed.）（2004）*The Canadian Oxford Dictionary*. 2nd edition. Ontario: Oxford Univ. Press. [本文中 *Oxford* と略称]

10）Barber, Katherine（2007）*Only in Canada You Say: A Treasury of Canadian Language*. Ontario: Oxford University Press.

11）Boberg, Charles（2010）*The English Language in Canada*. New York: Cambridge Univ. Press.

12）Fee, Margery & Janice McAlpine（2007）*Guide to Canadian English Usage.* 2nd edition. Ontario: Oxford Univ. Press. [本文中 Guide と略称]

13）Gwyn, Richard J.（2008）*John A.: The Man Who Made Us: The Life and Times of John A. Macdonald*. Toronto: Vintage Canada.

14）Orkin, Mark M.（1970）*Speaking Canadian English: An Informal Account of the English Language in Canada*. Toronto: General Publishing Company.

15）寺澤芳雄（編）（2002）『英語学要語辞典』東京：研究社

インターネット Web サイト

1）List of locations in Canada with an English name（https://en.wikipedia.org/wiki/List_of_locations_in_Canada_with_an_English_name）（参照 2020 年 2 月 18 日）

2）List of place names in Canada of Indigenous origin（https://en.wikipedia.org/wiki/List_of_place_names_in_Canada_of_Indi-genous_origin）（参照 2020 年 2 月 18 日）

Characteristics of Canadian English

Hisao Asada *

＜Abstract＞

A more complete understanding of the background of language will be effective in any approach to the language. In a series of my books and papers so far, we have not only discussed Canadian English from every aspect including phonetics, but also have argued that daily life in Canada—from the author's personal experiences and knowledge from having lived in Toronto, Canada—will help in an understanding of Canadian English.

Toronto, the largest city in Canada, is fairly close to Ottawa, the capital city, and is situated less than several hours from the French/English bilingual region of Quebec. It also has excellent transportation links to other areas in Canada, making it one of the best areas for the study of Canadian English.

Daily life and research in Toronto was most useful, and the author was able to gain many valuable insights into the culture of the Canadian people, as well as to discover many things not known here in Japan before.

This paper overviews the traits of Canadian English, following my previous papers discussing specific examples, with special reference to the preserving of British English. Fundamentally, the most distinctive feature of Canadian is a mixture of British and American styles, or an irregular distribution of them.

Therefore, for a complete understanding of Canadian, it would be better not to pursue the rules for their distributions but to describe each typical case or style from its historical and cultural viewpoint . It is hoped that this paper will lead to a more complete understanding of the language as well as daily life in Canada.

Keywords: Canadian English, Canadian culture and history,
place-names and demonyms in Canada, descriptive grammar, British English

* Part-time Lecturer at Department of Humanities, Seinan Jo Gakuin University